

『唄うすすき』 作：岩本憲嗣

■登場人物

小宮太郎(20) 自称ミュージシャン

原崎みえ(70) 上京してきた老人

○駅・高架下(夜)

小宮太郎がアコースティックギターを鳴らして一人熱唱している。

高架を電車が走り小宮の歌声を掻き消していく。

小宮「やかましいぞ！俺が唄ってるときは走るな！！」

小宮、駅前に視線をやると別のギター

デュオを大勢の人が取り囲んでいる。

デュオの曲が終わると大きな拍手。

小宮「場所がいいだけだろ、あんなの」

ギターデュオが次の曲を唄いだす。

小宮「……ちゃんとしたヴォーカルがいればな、あのオッサン俺と売れるんじゃないのかよ」

小宮、足元に置いた帽子を拾う。

帽子の中には僅かな小銭。

○小宮のアパート・外観(夜)

古い木造アパートが建っている。

○同・部屋前(夜)

小宮、郵便ポスト宅配便の不在通知をみつけて取り出す。

○同・台所(夜)

小宮、携帯電話をかけている。

小宮「米?そんなに気使わなくなったっていいって、いつまで子供扱いする気だよ」

小宮、棚からフライパンを出す

小宮「はいはいはい、わかってますよ。え?ああ今日も仕事でき。大丈夫だって、いい職場だよ。…うん、はい、そうですね。だからちゃんと働いてるしちゃんと食べてますって。うん、ごめんこれから仕事の残りをね。はい、はい、はい、じゃあ」

小宮、携帯電話を切る。携帯電話には通話時間15分の表示。

小宮「良かった、まだ無料通話でいけるな」

小宮、冷蔵庫を開ける。中には大量のもやしが入っている。

○同・居間(夜)

散らかった部屋の中で小宮が雑誌を机代りにもやし炒めを食べている。

無料の就職情報誌を開き、赤ペンで募集内容に×をつけていく。

×をつけた記事には全て「35歳迄」と記載されている。

小宮「ほら見ろ、働くたってあのオッサンには無理だろ?これだから田舎ものは分かってねえな、馬鹿!」

小宮、就職情報誌を壁に投げつける。

壁に貼ってあった写真が落ちる。

写真には小宮ともう一人中年男性がデュオで唄っている。

小宮「いい加減新しいボーカル探すか……」

○駅・高架下

小宮がギター片手に唄っている。

大きな荷物を抱えた原崎みえ(三)がやってくる、小宮を見つける。
荷物をその場に置き荷物の上に座り込む。

小宮、原崎に気づくが唄い続ける。

○同・(夕方)

ギター片手に唄い続ける小宮。腰掛けて虚ろな眼差しでそれを眺めるみえ。

○同・(夜)

ギター片手に唄い続ける小宮。腰掛けてそれを眺めるみえ。

高架を電車が走る。みえの頭がかくつと落ちる。

小宮「おい、バアさん!?!」

小宮、慌ててみえに駆け寄る。呼ぶ小宮の声が電車の音に掻き消される。

○公園のベンチ・(夜)

みえがベンチに腰掛けている。小宮が缶のお茶を差し出す。

小宮「で?大丈夫なのかバアさん」

みえ「ええ、少し眠かっただけです。お陰様で。その、有難うございます」

小宮「別に礼なんて…丸一日俺の演奏なんて聴いてて…好きなわけ?こういうの」

みえ「こういうの…と…といいますと?」

小宮、ギターを弾くジェスチャー

みえ「わき腹が痒い?」

小宮「いやそうじゃなくてさ、バアさん一体何してたわけ?」

みえ「ああ、実はですね、ひよっとしたら息子を知っておられるんじゃないかと…」

小宮「息子?」

みえ「ええ、40過ぎの息子なんです」

小宮「その人がどうしたの?」

みえ「米作りなんてやってられるかって飛び出してっただんです。丁度去年の今頃に」

小宮「で、東京に?」

みえ「はい。でもですね…」

みえ、小宮に新聞記事の切抜きを渡す。

小宮「倒産？」

みえ「息子が東京で勤めてるって連絡よこした会社がこんなだって知ってますね、慌てて連絡をとったんですが後の祭りで……」

小宮「繋がらないの？」

みえ「……………」

小宮「あぁごめんよ。で、東京まで探しに来たんだ？でも何で俺がその息子さん知ってるわけ？」

ミュージシャンなの？」

みえ「ミュージシャンシユシヤ？」

小宮「ミュージシャン。ほら、音楽やる人」

みえ「まさか、あの子縦笛だって満足にふけやしなかったのに、浪曲は得意でしたけど」

小宮「じゃあ何で？」

みえ「テレビで見たんです。東京で仕事をなくすと……なんていうんですか？駅だとか公園だとかで段ボールで……あ、気を悪くされましたか？」

小宮「あの、ちよつと待てバアさん。俺はそんなじゃないぞ」

みえ「え？でもその、帽子を置いて物乞いをされていたんで」

小宮「物乞いって……まあいいよ。そういう事なら俺には協力できなさそうだからさ、ほら交番行くとかさ」

みえ「そうですか……………」

小宮「さ、もう暗いしホテルに戻りな」

小宮、腰を上げてその場を去ろうと何歩か歩く。振り返る。みえはまだベンチに座っている。

小宮「バアさん？」

○小宮のアパート・台所

小宮がもやしを炒めている。

小宮「泊まる場所ないならそう言えよ」

みえがやってくる。

みえ「すみません、どうやって宿をとっていいのかも分からなくて」

小宮「そんなんで一人で東京来るか普通？」

みえ「でも息子が…」

みえ、足元に段ボールが置いてあるのに気づく。

みえ「あれ？これは？」

小宮「ああ米。…：…：そうか、もやしだけってわけにはいかないよな。ごめんバアさん、ちよつとそれ開けてもらっていいかな」

みえ「ええ、いくらでも」

みえ、段ボールを明けると中からすすきが出てくる。

みえ「あら、すすき？」

小宮「え？」

小宮、ガスの火を消し手を休める。

小宮「本当だ。…：…：そうか、そんな時期か」

みえ「そんな時期？」

小宮「毎年十五夜には家族揃ってお月見してたんだ。でも俺がこうやって東京出てきてからは毎年お袋がそうやって」

みえ「いいお母さんですね」

小宮「すすきなんて送ってもらってもね。腹の足しにもならないし」

みえ「ウチの息子はすすき大好きなんですよ」

小宮「すすきを？美味しいの？」

みえ「食べるわけじゃないですよ」

小宮「じゃ何で？」

みえ「ほら、枯れて初めて人に愛される草なんてすすきくらいじゃないですか」

小宮「ああ」

みえ「青いすすきを見たって誰も何とも思わないですよのね」

小宮「…俺もそんなこと言ってるオッサン知ってた。俺は遅咲きなんだって」

みえ「そうですか」

小宮「ギターなんて全然弾けやしないんだけど歌がメチャメチャ上手くてさ

みえ「へえ」

小宮「でもあれなんだって、やっぱり親の為にも真面目に働くんだって、どうせなら米みたいに実いつけて親孝行しろって」

みえ「実がなくなっても充分じゃないですか」

小宮「そう？俺はどうもね…あのオッサン」

みえ「どうされたんですか？」

小宮「ああごめん、ちよつとね。お米これから炊くからさ、それまでほら、これ、前菜ってやつ？」

みえ「もやし？」

小宮「ああもやし。ごめん、そこのお盆取って貰っていい？」

みえ「お盆？」

みえ、辺りをキョロキョロする。

小宮「ほら、その厚い雑誌あるでしょ？」

みえ「ああ、これがお盆……ですか」

小宮「そ。足元気をつけて」

みえ、雑誌を取ろうと屈むと、雑誌の上に写真が落ちてることに気づく。それをとってじつとみつめて動かない。

小宮「あれ？どうしたの？ぎっくり腰？」

みえ「……この写真は？」

小宮「え？ああ俺の前の……相方」

みえ「すすきですよこれ」

小宮「え？」

みえ「見つけました、ウチの馬鹿すすき」

【終】

※ご利用上の注意※

・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。

・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までお問い合わせ頂けますようお願いいたします。

お願い致します。

- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間で集まった練習でのご利用。
- ・ Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumbal227@hotmail.com (岩本)